

山本幸男著

『奈良朝仏教史攷』

三舟隆之

第一章 天平十二年の『華嚴經』講説

—金鐘寺・元興寺・大安寺をめぐる人々—

第二章 『華嚴經』講説を支えた学僧たち—正倉院文書からみた天平十六年の様相—

第三章 東大寺華嚴宗の教学と実践—天平勝宝三年の「章疏目録」を通して—

付論1 華嚴宗関係章疏目録—勝宝録・円超録を中心に—

第四章 慈訓と内裏—「花嚴講師」の役割をめぐる—

II 政治と仏教

第五章 天平宝字二年の『金剛般若經』書写—入唐廻使と唐風政策の様相—

第六章 孝謙太上天皇と道鏡—正倉院文書からみた政柄分担宣言期の仏事行為—

付論2 法華寺と内裏—孝謙太上天皇の居所をめぐる—

第七章 早良親王と淡海三船—奈良末期の大安寺をめぐる人々—

III 信仰と写經

第八章 文室浄三の無勝浄土信仰—「沙門釈浄三菩薩伝」と「仏足石記」を通して—

第九章 道璿・鑑真と淡海三船—阿弥陀浄土信仰の内実をめぐる—

第十章 石上宅嗣と『維摩經』—仏教、老莊思想との交渉—

第十一章 玄昉将来經典と「五月一日經」の書写

まず第I部の『華嚴經』と学僧—では、奈良時代の仏教における『華嚴經』による華嚴宗の位置について再確認する。第一章の「天平十二年の『華嚴經』講説」では、僧正の玄昉が『華嚴經』講説の講師に、当時『華嚴經』研究の最先端であった大安寺僧ではなく、元興寺僧を指名した背景について考察する。

第二章では、『華嚴經』講説に関係した学僧たちに言及する。「五月一日經」書写のための章疏などの収納・返送の状況を「正倉院文書」から分析し、その結果、金鐘寺において慈訓を中心に華嚴宗の研鑽が行われていたことを明らかにする。

第三章では、『正倉院文書』に残る「章疏目録」から東大寺華嚴宗の学問状況に検

討を加え、さらに付論として「華嚴宗関係章疏目録」の一覧を整理する。そして第四章では、「花嚴講師」としての内裏における慈訓の位置を、「正倉院文書」の分析から考察する。

この第I部では、『華嚴經』が重視されていくなかで、それをめぐる学僧たちの動向を、「正倉院文書」の分析と絡めて精緻に分析している。

第II部では、聖武天皇没後の政治と仏教の関係について分析する。まず第五章では、光明皇太後の病氣平癒を祈願して書写された『金剛般若經』が、唐の玄宗が重用した經典であることに注目し、その背景に藤原仲麻呂による唐風政策が存在することを指摘する。

第六章では、淳仁天皇・藤原仲麻呂と孝謙上皇・道鏡の対立が鮮明化するなかで、孝謙・道鏡側の仏事行為に注目し、『大般若經』の写經とあわせて三昧經典奉請の意味を考察する。そしてそれらの関係文書のなかで、孝謙上皇の「内裏」と称される居所が法華寺であることを指摘する。また第七章では、「大安寺碑文」を通じて早良親王と淡海三船の関係を考察する。

第III部では、文室浄三・淡海三船・石上宅嗣の阿弥陀浄土信仰の内実を再検討し、生者による浄土信仰の存在に言及し、また石上宅嗣の老莊思想と『維摩經』との関係にも言及する。最後に玄昉将来經典と「五月一日經」の書写との関係から、玄昉が奈良仏教に与えた影響を考察する。

本書の特徴は、「正倉院文書」の精緻な分析から学僧の動向や政治と仏教の背景まで考察する点であろう。これは前著でも同様だが、膨大な「正倉院文書」を丹念に読んで分析する研究方法が背景にあり、その文書の一つ一つを検証したうえで、全体像を築いていくという研究方法が随所に見受けられる。

従来、古代の仏教史研究というと、とかく南都の寺院や行基などの知名な僧侶、そして国家仏教体制などの研究が中心であったが、本書は「正倉院文書」の写經関係文書の分析から学僧の動向や經典の貸借関係を重視し、その分析から新たな仏教史を描こうという視点が斬新であると思う。さらに著者は仏教学にも明るく、經典の内容などについても深い理解が存在する。そして文書や經典の分析にとどまらず、その背後

にある学僧や当時の政権の迷惑をはじめ、鑑真などの渡来僧がもたらした新知識や経典類との関係についても言及しており、奈良時代の仏教を取り巻く政治的・対外的環境についても深く知ることができる内容となっている。

最後に評者の勝手な感想であるが、第三部で文室浄三や「文人の首」と称された淡海三船・石上宅嗣たちの仏教信仰が、どのようなものであったかを理解できたことは有益であった。従来、奈良時代の阿弥陀淨土信仰は追善供養的な要素が強いと理解していたが、本書によって再検討する必要があると感じた。また本書ではあまり強調されていなかったが、奈良仏教における大安寺の重要性も再検討する必要があると思われる。

以上、本書の概要について紹介を行ったが、紙数の関係もあり十分に内容に言及できなかったと思えない。本書は「正倉院文書」の精緻な分析を行ってきた著者の労作であり、仏教史研究者のみならず、正倉院文書研究者にとっても有益である。最近では奈良時代の仏教史研究は少なくなってきたが、まだ本書のように地道な研究の積み

重ねから、新たな成果に発展する可能性があるということを知ることができたのは幸いであった。今後の仏教史研究には不可欠な書であると思われるので、是非ともご一読を勧めたい。

(みふね・たかゆき 東京医療保健大学医療保健学部准教授)
(A5判、五二ページ、一一八八〇円、法蔵館、二〇一五・一一刊)

相澤 央著

『越後と佐渡の古代社会』

出土文字資料の読解

浅井 勝利

著者は、出身地であり学業を修めた地でもある新潟県において、長年地域に密着した研究、とりわけ木簡や墨書土器などの出土文字資料等を用いた地道な研究に携わってきた。本書は、著者がこれまで発表してきた論文に新たに書き下ろした論文を加え、古代における越後・佐渡の社会を多様

な視点から解明しようとした著書である。まず、本書の構成を以下に示す。

序

第一編 越後国と蝦夷政策

第一章 越後国の成立と蝦夷政策

第二章 古代北疆地域の郡制支配―越

後国沼垂郡・磐船郡を中心に―

第三章 律令国家の蝦夷政策と古代越

後国―近年の越後国木簡の検討から―

第二編 越後国の支配と開発

第一章 長岡市八幡林遺跡と郡の支配

第二章 長岡市下ノ西遺跡出土の出拳

関係木簡について

第三章 上越市榎井A遺跡出土木簡と

古代の頸城郡

第四章 新潟市駒首湯遺跡出土木簡と

九世紀の越後国

第三編 越後国の交通

第一章 柏崎市箕輪遺跡出土木簡の

「駅家村」と交通

第二章 古代越後平野の内水面交通

第四編 「辺境」としての佐渡国

第一章 佐渡国の贅―平城京跡二条大

路出土木簡の検討から―

第二章 北の辺境・佐渡国の特質

第三章 佐渡国の鵜

あとがき

このうち、第二編第三章と第四編第三章が本書のために新たに執筆された論文となっている。

第一編は古代越後国の社会を、対蝦夷政策という視点から解明しようとしたものとなっている。いうまでもなく、越後国の古代史は北にある蝦夷の存在を抜きには語れないのであって、越後古代史究明の最も基礎的な論考となっている。令制越後国の成立から二つの城柵による支配の特殊性、阿賀野川以北の地域とそれ以外の地域の相違からくる支配の特徴などが述べられている。

第二編は八幡林遺跡、下ノ西遺跡（以上長岡市）、榎井A遺跡（上越市）、駒首湯遺跡（新潟市）という四遺跡から出土した木簡等を素材として、越後国内における支配体制の解明を目指したものである。奈良・平安時代における越後国は他国同様、律令的支配体制に組み込まれており、その特性をあぶり出すことで辺境地域における律令的

そのものの本質をも明らかにすることができるとは思えないかと予測させるものである。なかでも新稿である第三章は、木簡の記載から初期荘園における労働力の動員体制、さらに在地の郡領氏族の介在を明らかにするもので興味深い。

第三編は、交通という視点から越後国の特質をさぐるものである。第一章では、解明の遅れている越後国北陸道の駅家村の様相を、木簡から明らかにしている。また、第二章でテーマとした内水面交通は、大河川や潟湖等による湿地帯からなる越後平野部において欠くべからざるものであることから、古代における越後国の交通の特徴をもっとも端的に示すものである。とりわけ、内水面と海上交通の結節点における国府の支配を明らかにした点は重要である。

第四編は、佐渡国について、「辺境」という立場からその特質を明らかにするものである。佐渡国の贅、とりわけ鰐に着目し、佐渡国の境界としての特殊性を指摘する。また鵜の貢進を取り上げ、そこに示される古代王権による支配の象徴性を明らかにしている。

次に、若干気にかかる点を挙げる。

まず、全編にわたって遺物である木簡や墨書土器などの出土文字資料に対する考察はさすがと思われるものがある一方で、遺跡そのものについての目配りがもう少しあってもよかったのではないかと思える点である。近年の調査により、例えば城柵近傍における同時代の集落なども徐々に明らかになってきているのであるが、これらに関する著者の見解などを盛り込んでいただければ、より一層説得力も増したのではないかと思われる。

また、第四編の新稿である「佐渡国の鵜」が、それ単独ではきわめてユニークな視点による古代社会解明へのアプローチとなっているにもかかわらず、佐渡国の特質を位置づけるにはいま一つ踏み込みが足りないように感じられる点である。

さらに、各章が別個に発表された論文であることにも起因するのかもしれないが、時代ごとの推移やそれぞれの時代における特質などの位置づけが、やや不鮮明であるように思える。同じ古代というなかでも、城柵の設置された時期と荘園の置かれたような時期では、在地の状況はもとより、政権の支配体制にも大きな変化があるはずで